

魅

力人

みりよくびと

Shiroko Watanabe

縁起物として人々に親しまれ、サイズが小さくなると愛らしさも漂うだるま。中でも福島のだるまは、鮮やかな赤とカッと見開いた目で家の中に入り込もうとする不幸を退散させると言われる縁起物です。渡辺浩子さんは、和紙の里、二本松市上川崎で生まれ育ち、結婚して福島市へ。以来、農閑期の副業として福島のだるまを作り続けている職人です。ご自宅を訪ねてだるまの歴史と魅力、職人としての生き方を伺いました。



矢野目だるま職人 渡辺 浩子 さん

昭和27年、二本松市上川崎生まれ。昭和49年、福島市南矢野目のだるま職人・渡辺英雄さんと結婚。以来、冬になると家族でだるま制作に励んできた。平成5年、夫が急逝。以後、一人でだるまの制作を続けている。だるま好きが集まる同好会「全日本だるま研究会」会員。



時代が変わっても 私は伝統を守るとい う生き方を貫きます

江戸末期から大正・昭和と 福島のだるまの変遷をたどる

かつて福島市内には「飯坂だるま」「瀬上だるま」など、地名を冠しただるまが複数あり、市内や周辺で開かれる歳の市などで売られていました。しかし、それも年々減少し現在は渡辺家の「矢野目だるま」と、村田家の「丸子だるま」だけになってしまったそうです。

渡辺家のだるまづくりは、1845（弘化2）年から始まりました。「先代と先々代は自分で木型を彫っていました。江戸時代から昭和までの木型を並べると少しずつ変わってきたことが分かりますよ」と渡辺さん。早速見せていただくと、江戸時代の木型は細身で座禅する達磨大師のように厳しい表情をしています。大正、昭和と時代が進むにつれてボディーが少しずつ丸くなり、表情も少しだけ厳しさが取れます。「今は、

出店予定日

平成30年
1月27日(土)・28日(日)
「黒岩虚空蔵尊例大祭冬祭り」
黒岩虚空蔵尊満願寺
(福島市黒岩字上ノ町43)

平成30年
2月10日(土)・11日(日・祝)
「信夫三山暁まいり」
護国神社
(福島市駒山1)

福々しく丸々とした形の方が好まれるので、江戸時代の木型は使っていません。ただお客さまの中には、スマートフォンでだるまを好まれる方もいらっしゃるの、私は大正と昭和の両方の木型を使っています」と渡辺さん。



矢野目だるまの木型。右から江戸時代、大正、昭和とふっくらとしていく様子分かる。サイズは3寸(10.6cm)から3尺(90.9cm)まである。手前は起き姫の木型。1つで2体できる

約500個、一人で一気に作る 師走は文字通り超多忙

渡辺さんのだるま作りは、12月初旬から始まります。①和紙をのりですり合わせてから木型に貼り付ける②天日で乾かす③木型を抜いて膠で切れ目を閉じる④下地の胡粉を塗る⑤絵付けという作業を、今は一人でこなします。歳の市に間に合うよう400〜500個を一気に作るの、師走は文字通り多忙を極めるそうです。

「工程が一番難しいのは目入れですが、顔料の調合も難しい」と渡辺さん。「膠ひと鍋に対して赤い顔料を

どれくらい入れるかとか、夫や先代のおじいちゃんたちが調整していた時の記憶をたどりながらやっています」。ふりや顔料など、年々入手が困難になってきている材料もあるそうですが、渡辺さんは受け継いだ通り忠実に制作しています。「最近は、かわいらしいだるまグッズがいろいろ生まれれています。でも矢野目だるまは、矢野目だるまのまま、変わらずにこれからもこのスタイルを貫くつもりです」。あくまでも伝統を守るという生き方を選んだ渡辺さん。一つ一つ手描きで仕上げている渡辺さんのだるまには、厳冬の威厳と冬晴れのようなすがすがしさが漂っていました。



福島のだるまと一緒に江戸時代から作られてきた。高さ約7cm。底の部分に重りが付いており、倒すと起き上がる。東北地方は、かつて養蚕が盛んだったことから良い繭ができるようにと神棚に飾った。現在では無病息災の縁起物の紅白人形として伝わっている

矢野目だるまの特徴

祓魔招福の縁起物。邪気を払うと言われる赤い色の胴に日本で吉祥とされている鶴と亀、松竹梅が顔に描かれている。悪をならみつけて退散させ、福を呼ぶ縁起物なので初めから目が入っているのが最大の特徴。やや縦長のボディー、平たい頭頂部など三春だるまとの共通点が多い。平成9年、渡辺家と村田家の2軒で福島県伝統的工芸品「福島だるま」と指定された。



※宝珠（ほうじゆ）といわれる宝の玉の中に「福」の文字が入る。